

宮古群島のキケマン類について

宮古高等学校 川 上 勲

キケマン類はケシ科の越年生草本で、全体が軟質で水っぽく、全草とも簡単に指でつぶされるほどである。傷つけたり、すりつぶしたりすると悪臭がある。その臭いのために方言名がヤーマノンマガユスパズィギー（八重山の御婦人の小便の臭いのする草）（平良市の方言名）の名がある。宮古島では民間薬として昔から有名で、熱冷ましの名薬として知られている。

以前から、ときどき「ヤーマノンマガユスパズィギーは和名では何というか。」と聞かれている。今までは、すぐにその場でシマキケマン *Corydalis tashiroi* Mak. s と答えていたが、図鑑や植物誌で調べてみると、特徴が今一つ合わない。

むしろ、頻繁に見られ、個体数が多いのはムニンキケマン *Corydalis heterocarpa* S. et Z. var. *brachytyla* (Koidz.) Ohwi (1953)の方ではないかと思うようになり、3年ほど前からは、特徴をきいて判断したり、現物を見ないときは個体数として多いと思われる方にして、多分にムニンキケマンだと思えます。と慎重に答えることにしている。どうしてシマキケマンとなったかという問題がある。それは、先輩やくわしいひとからそ

う教え伝えられてきたことによるだろう。普通はいちいち今回のように検索したり、図鑑で比べたりしないで教えられたら、そのまま覚えてしまう。一般の人からは実の細いもの（シマキケマン）と太いもの（キケマンとムニンキケマン）がある。ということを知っていないので、もしかしたら一種類だけが見られるかも知れない。

この機会に両方の特徴を洗い出し、私自身の今後の判断の材料にしたいと考えている。

1 宮古群島に分布するキケマン類

キケマン属 (*Corydalis*) は日本では13種分布する。沖縄では栽培種を除くと、次の5種が「琉球植物目録(1977、初島・天野)」に記載されている。

ムニンキケマン

奄美、沖縄、大東、宮古 海岸

キケマン

奄美群島、沖縄、先島群島 海岸～山地

ナンゴクキケマン

先島群島、魚釣 低地

※ナンゴクキケマンは琉球植物誌(初島、1975、P 294)によると与那国(大井氏による)だけ。

ムラサキケマン

奄美、徳之島、沖縄、低地 山地 稀

シマキケマン

各島 低地

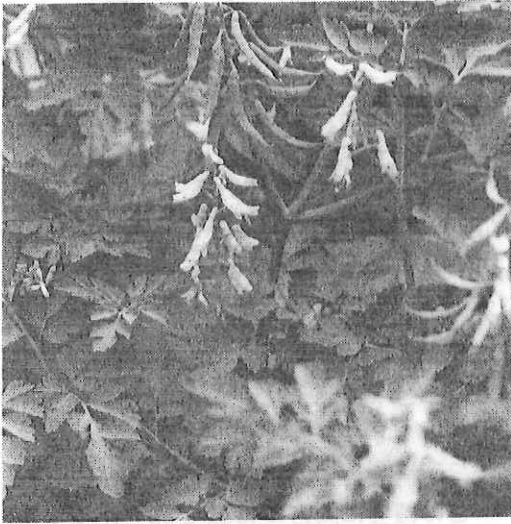


図1 ムニンキケマン
(撮影地 平良市 腰原)

宮古島での分布を調べると、「宮古の植物(1976、初島)」では、ムニンキケマンとシマキケマンが記載され、キケマンは載っていない。シマキケマンについては未見であるが報告があったものとある。E. H. Walkerの「FLOLA OF OKINAWA AND THE SOUTHERN RYUKYU ISLANDS (1975)」にはキケマンとムニンキケマンが1923~1937にかけて採集されているとあるが、シマキケマンについては宮古での記録は書かれていない。結局、宮古に分布するキケマン類は可能性も含めて、キケマン、ムニンキケマン、シマキケマンの3種であるようだ。

キケマン属はケシ科の中でも花の形の進化が特殊であり、花の形から名がついている。ケマンは華萬のことで国語辞典

によると次のように記されている。

「莊嚴具として梁(はり)などにかける。上端が直線に近い団扇(うちわ)状の仏具。」、和名は花の形が華萬に似ていることに因なんだものである。花壇に栽培するヒナゲシの花弁からすると同じ仲間とは思えないほど変わった花をしているのがわかる。キケマンのキは黄で花の色を示している。本土ではムラサキケマン(花色が紅紫色)が林のへり、道ばた、やぶの中、湿った畑の周辺などにごく普通に見られる。沖縄本島でもまれに見られるようである。ムラサキケマンはヤブケマンとも呼ばれている。キケマン *Corydalis heterocarpa* S. et Z. var *japonica* Ohwi は関東以南の海辺から九州、奄美、沖縄かけて分布し、ハマキケマンとも呼ばれる。海岸は黒潮の影響で内陸部よりも暖かいことから、海岸沿いに分布する種は他にも多い。ムニンキケマンのムニンは「無人」である。小笠原諸島



図2 ムニンキケマンの花と果実
(撮影地 平良市 腰原)

表 1

項 目	キケマン	ムニンキケマン	シマキケマン
葉 の 形	葉は2回3出葉で葉面は長さ、幅とも10~25 cmの三角形。又は広卵状三角形。		2回羽状複葉で葉面は卵形。又は広卵形
花 の 色	濃黄色		淡黄色
種子の表面	円柱状の突起の微小突起を密付する。	円錐状の微小突起を密付する。	細かい凹凸が規則正しく並び、表面はでこぼこしている。
果実の長さ	25~35 mm	20~30 mm	30~45 mm
果実の幅	3~4 mm	4~5 mm	3~4 mm
果実の形状	狭長楕円形又は、狭披針形。 果長やや太い。	披針形、果実の長さの割には果幅が大きく、果長は最も太い。	線形又は、披針状線形でまっすぐ。 果長は細い。
その他の特徴	草丈は高く40~60cm。(ただし、環境による。)		種子は凹点がある。 草丈は低く15~40cm (同)

は1593年に発見されて、江戸時代に入って人が移住するまで、「無人島」と呼ばれていたらしい。すなわち、ムニンは小笠原を意味し、それにちなんで付けられたのがムニン・・である。他にも小笠原に産するムニンヤツデ等の植物名がある。ムニンキケマンは伊豆七島、小笠原、琉球等の暖かい所を分布地としている。シマキケマンの島は台湾を示しているようで台湾に産するという意味を持たしている。

2. 形態的特徴

宮古に自生していると思われるキケマン、ムニンキケマン、シマキケマンの検索については、いくつかの図書を参考に表1のようにしてまとめることができた

がこの3種について詳しさを平等に載せている本はまったくない。琉球植物誌(初島、1975、P294)の方が比較的参考にできた。

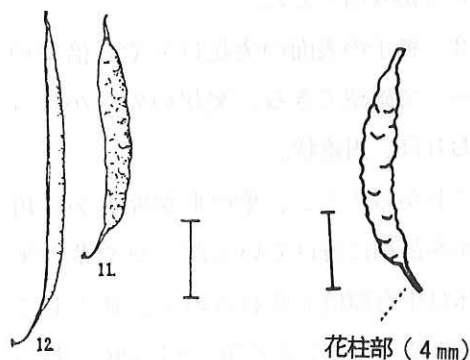
※1 果実の長さ、幅は本によって異なっているので琉球植物誌(初島、1975、P294)を拠り所とした。

※2 種子の表面の突起はやや高倍率のルーペで確認できる。突起の先端が尖っておりば、円錐状。

これからすると、葉の形が卵形か三角形かを最初に分けているが、葉や茎の栄養体は生育環境で変わるので、私としては、さや(果実)形を第一の区別点に持っていきたい。すなわち、果実が細くてまっすぐ、花の色は薄黄であればシマキケマンである。それに対し、花色が濃黄色で、

さや（果実）の表面がややでこぼことしていて太く、果実全体がゆるく曲がって
いればムニンケケマンかキケマンである。
ムニンケケマンとキケマンの区別は他の
区別点を自分でつかむまでは、面倒でも
種子の表面を拡大鏡でみて判断したほう
が良さそうである。この原稿を書いている
間の2月21日に、平良市の腰原で採
集したキケマン属について調べた結果、
次のような観察が出来たのでムニンケケ
マンと判断した。

- 葉の形……葉の形は三角形、2回の3
出葉。
- 果実の長さ……… 3 cm
- 果実の幅……… 4 mm
- 果実の形状……… やや太く、表面は中
の種子が浮き出て少しでこぼこ。少し
曲がっている。未熟果はふちが波うち、
ややくびれ感が残っている。果実の先
端部についている花柱（メシベ）部の
長さは約4 mm。



11. キケマン 12. シマキケマン

（原色日本植物図鑑草
本編（中）、北村他、
昭53、保育社P191）
より

ムニンケケマンの果実
（H6. 2. 21、腰原
で採集）

図3

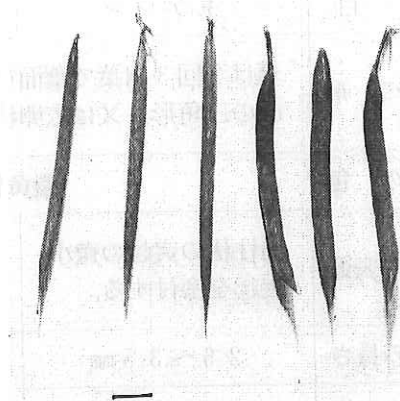


図4 シマキケマンの種子（左3つ）とムニンケケマンの種子（右3つ）（線長は1 cm）
（採集地 平良市）

- 種子の表面……… 種子は黒色で表面に
円錐状の突起を密生。
- 草丈……… 環境の悪い所（コン
クリートの隙間）のため10cmほど。
- 種子の並び方……… レンズを厚くした形
の径2 mmほどの黒い種子が2列になら
んでいる。
- 花の色……… 原色図鑑のものをみ
た感じでは濃い黄色のうちに入ると思
うが、薄黄の花を見てないので比較し
にくい。

3. 薬草として

宮古ではキケマン類（以後、キケマン
と書く）を熱さましの特效薬としている。
民間薬の効き目の顕著な例の見本となる
ものである。今は、解熱剤は座薬にしろ、
飲み薬にしろ、効き目が早く、副作用の
少ない良質のものが製薬会社で製造され、

病院に供給されている。しかも、簡単に医者にかかれる社会になっていて、風邪のようなちょっとした病気でも病院へいっている。昔は高価で医者にかかれず、市販の薬も簡単に手に入らなかったものと思われる。風邪で熱が出た位では医者にかかれる状況ではなかったことが容易に想像できる。そんなとき、キケマンは重宝されたのであろう。今は、病気になれば病院へいくのが一番良い方法である。キケマンの薬効が良いからといって、病院にいかずこれで済まそうとする考えは感心できない。ある30代の婦人の話しでは、子供には上の子も、いまの子にもそれを飲ましてきたと話していたが賛成できない。

ケシ科は成分としてアルカロイドを含んでいて、それが薬効をあらわしている。ケシから取れるモルヒネもアルカロイドの一種である。モルヒネは強力な痛み止めとして病院で特殊な場合に使用されるが、習慣性の強い麻薬としても有名である。そのため、栽培が法律で禁止されている。また、薬用植物図鑑に載っているケシ科のいくつかの植物の薬効成分も例外なくアルカロイドである。キケマンのいやな臭いと薬効もアルカロイドであることは容易に予想される。アルカロイドには有毒なものが多いので要注意である。ある50代の婦人の話しでは、キケマンの生汁を湯呑み茶碗で、1回の量を多く飲まされて、「アンマース、アンマースし

ていた。」という。方言でいうアンマースがうまく説明できないが、強い不快感であることは間違いない。くれぐれも量を間違わないように注意が必要である。薬の適量は体重に比例するので子どもに使うときは慎重でなければならない。

キケマンの薬効について、身の回りにある薬草の本を調べたが、不思議なことにどれにもものっていない。その中には木村他の「原色薬用植物図鑑（昭和53、保育社）」、「薬用植物学各論（昭和52、広川書店）や沖縄の薬草図鑑として有名な多和田氏の「家庭栽培と薬効（昭和56、新星図書）」とか吉元氏の「健康と薬草（1983、琉球新報社）」、「沖縄の薬草（1976、月刊沖縄社）」などが入っているがどれにもない。ヨモギがほとんどに載っているのとは対照的である。どうも、宮古だけに伝えられている民間薬のようである。次の文は、筆者が別への寄稿のために書いたものの一部である。

・ムニンキケマン（ヤーマヌンマガスバウサ（仲地）、ヌーマヌスバイウサ（国仲））
花は春と秋にさく。北の人（佐良浜地区）の子供が1ヶ月、熱が下がらなかった。ズブン熱（時間時間に出る熱のこと。）であった、医者はなんと言っているかときいても、流行感冒といていた。子供はやせていた。マズー（半信半疑で試みること）と、ヤーマヌンマガスバウサを煎じて飲ますことにし、寛忠（話者）

がさがしてきて渡した。砂糖をいれて煎じて飲ますと、てき面に効いた。今のカイン（熱冷ましの薬の1つ）よりも効いた。

キケマン類については、次のような記録が見つかった。「草内物語（耕地と住居の境を草内という）元伊良部国民学校訓導、大井浩太郎」の名で手書きの冊子を国仲恵彦氏が保管していた。それには、那覇市楚辺1-10-18の住所が後から書き添えられている。その中の「(Ⅲ)角田与次右衛門伊良部島漂流記（秋田魁新聞掲載、大井浩太郎沖大教授）」の中に次のような部分がかかれている。『鶏の汁を取合せて進める。婦人たちの或者は薬草を採りに出て、各種の薬草を持ち帰る。これを見た与次右衛門、集まった人々に大和草本の概要を説明し、そのうち臭いのわるいシマキケマン（馬のシバイ草）をつまみあげ、効きめのある薬草はこれであるという。続いて己たちの漂流の理由を説明し、（原文のまま）』

これは1744年霜月に、秋田の船員が北海道から江戸へ向かう途中の船上で難破し、佐和田の人達に6人が助けられ、伊良部一宮古本島一首里一鹿児島と送られて、無事古里に戻った話である。これからすると宮古で熱冷ましとして用いる方法がこのころ伝わったことを伺わせる。

今後は、「大和草本」なるものがあるか、秋田県の民間薬として、キケマンが伝えられて

いるかを調べると、さらにおもしろくなると思う。

4. シマキケマン

この原稿の校正に入る直前の3月21日に宮古本島東岸の真謝漁港に行く機会があり、そこでシマキケマンをみることができ、採集できたのでそれについてもふ



図5 シマキケマンの果実

（撮影地 平良市 真謝港）

れておきたい。

場所は真謝漁港に沿ったサトウキビ畑で、漁港に向かって坂をおりてきての右手側のサトウキビ畑である。草丈2m位の「夏植え」の林床に広い面積に渡ってかなりの個体数があった。その畑は第三紀層の粘土質の土であることから、東岸一帯の似た環境（例えば浦底ダム付近等）に自生し、分布域をムニンキケマンと分けている可能性がある。

特徴を上げるとつぎのようになる。

草丈は25cm位、茎も細い。花は15mmほ

ど、ほとんど白く、申し訳程度に薄く黄味を帯びている。果実は細く棒状で、くびれや曲がりがなくまっすぐ、果長は3.5～4 cm、種子が二列に並んでいるのが外からわかる。種子は黒くレンズ状で、1.5 mmの中。表面は凹点が規則正しく並び密生している。そのため、細かいでこぼことなっている。なお、シマキケマンの種子の表面には円錐状小突起があるとの図書もある（日本草本植物総検索誌 双子葉編、杉本、昭和40年、六月社、P178）が観察の結果、ムニンケケマンにははっきりとした先の尖った突起の密布が20倍位のルーペで見られるのにシマキケマンのほうでは見られなかった。

シマキケマンと里近くで普通に見られるムニンケケマンとの違いは、文献でみるより顕著である。その違いを次のように整理してみた。

シマキケマンは草丈、茎の太さ、花の大きさともムニンケケマンの半分位の大きさを全体から受け、ムニンケケマンの方がボリュームがある。種子は色、大きさは同じで2 mmに足りない。しかし、ムニンの方ははっきりとした、先のとがっ

た突起を表面に密生し、シマのほうはそれがない。また、レンズの厚みがムニンのほうが厚い。花はムニンの方は鮮やかな黄色。大きさも2 cmほどと、1.5 cm（シマ）以下とはっきりとした区別点がある。果実の形は最も区別しやすいものである。（図4）。葉の形も小葉の縁をたどると一方は三角形。他方は卵形であるが生育環境によって大きさが異なるので、見分けるのはやはり果実形、花の大きさ、色が良いと思う。

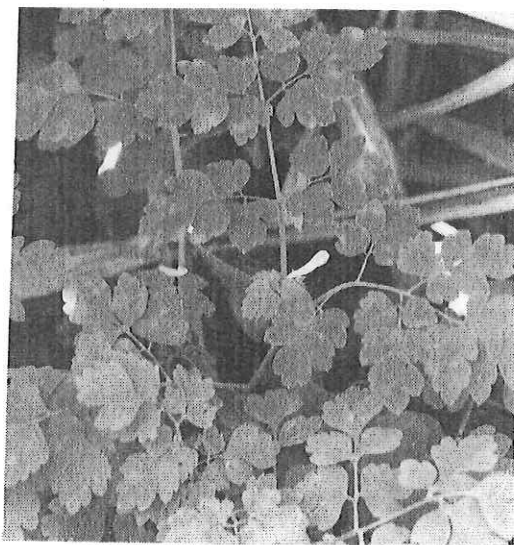


図6 シマキケマンの花
（撮影地 平良市 真謝港）